

「濃度の濃い1日だった」—第38回中間研究集会の報告

2020年1月12日に、「日韓関係をどうとらえどう臨むか—2020年愛知／東海大会に向けて」をテーマに、第38回中間研究集会を開催しました。内容は次の通りです。

講演 「歴史に学び朝鮮半島との平和を築く」加藤圭木氏（一橋大学）

報告① 「日韓共同の授業実践交流—26年続いた意義を語る」三橋広夫氏（日韓教育実践研究会代表）

報告② 「東京オリンピックの光と影」石出法太氏（歴教協会会員）

会全体に対して、「濃度の濃い1日だった」

「1日通して満席状況の様子で、3人の方々の話が興味深く学ぶべき豊かな内容のものであったことを物語っていたと思う」「中間研究集会のテーマが、いつもその時々的情勢を捉えておもしろいなと思う」「とても興味深い話をたくさん聞くことができました。また機会があれば参加したい」という感想が寄せられました



以下、寄せられた意見・感想を中心に当日の内容を紹介します。それぞれの意見・感想の最後に（年齢、性別等）を示しました。

（1）加藤圭木氏の講演に関して

＜講演の前半では、今起きている徴用工の問題とはどういうことか、基本的なことをわかりやすく話されました＞

▽ 日本人が朝鮮支配においてどんなことをしたのかを具体的に知ることができ驚いた。多くの日本人が知らないし、認めたくない事実だろうが、これらの残虐的事実をどう多くの日本国民に知らせるかが大きな課題だと思った。（70代男性無職）

▼ 「植民地支配をしたこと自体が不法」「民族差別」という人権問題が根底にあるという指摘は、わかっていそうで見落としがちな視点だと感じた。（30代女性中教員）

▽ 「徴用工問題」「慰安婦問題」の本質的なことは人権問題という視点で考えることの意味に気付かされた。（無記載）

▼ 加藤さんの発言にあった人道に対する罪、人権を認識することの、教育での重要性を痛感する。ダーバン会議（ダーバン宣言）は学ばなければと思った。（無記載）

▽ 加藤講演は、今、日韓で問題になっている徴用工を始めとする歴史認識にかかわる問題について、歴史上の様々な事実や論点をあげて説得力のあるものだった。…特に、徴用工や慰安婦問題を人権問題として考えるべきとの指摘は、極めてまっとうで納得できる意見と思われた。授業作りにあたりしっかりと柱に据えるべき考えだと思う。具体的な資料をを数多く提供していただいたので、これを教材とした授業を模索してみたい。（60代男性高教員）

▼ 「明治以降の日本の植民地政策について戦後民主主義では向き合っていない」という指摘は、常日頃考えていたがあらためて共感した。（無記載）

▽ 徴用工問題の事実についてどうして日本のマスコミは報道しないのか。マスコミは大本営発表に成り下がっているように感じる。(60代男性中高教員)

<講演の後半では、ご自身の研究を具体的に取りあげて日本の植民地統治の実状を紹介されました。>



▼ (30代の若い研究者が強制労働の歴史を、院生や学生の指導をされていることも含めて) 未来に希望を感じるものだった。強制労働の歴史を1939年か1944年以降かに限定せず、1910年代の植民地の構造から根本的に問う研究をされていること、また、植民地政策に抗する1915年の虎島の労働者の戦いのように、地方からの視点から研究されていることなどお聞きし、執筆されたものをぜひ読んで勉強したいと思った。植民地主義と向き合っ

これなかった日本の社会だが、若い方の視点で学んでいかなければならないことがたくさんあると思った。(60代女元中教員)

▽ とても参考になった。特に後半の植民地支配の具体的な加害・被害の実態は、知らないことが多く、さすがは研究者だと感心した。(70代男性)

▼ 朝鮮研究の「新しさ」に触れ…真実による恐怖と悲劇性が(縮小どころか)これからも拡大していくことを感じざるを得ない。(無記載)

▽ 地域からみる植民地支配は、追体験できるいい研究の発表だった。(無記載)

<また、話しの随所で現在の日韓関係を学生がどうとらえているかなどを紹介されました。会場から、日本が酷いことをしたという話しに高校生などが身をひいてしまうという、学校・教育におけるこの問題の取り扱い方に関しても提起されました。>

▼ 日本の学生は植民地支配の事実を知らなさすぎる。韓国留学生との知識の差にたいへん驚いた。(60代女性元中教員)

▽ 紹介された韓国人の留学生が言ったという「日本に民主主義がないのは天皇制が続いているからじゃないか」に、思わず大きく何回もうなずいた。今、その疑問を口に出すことができない世の中…、大人がそういう世の中をつくっている…、学生がその他の政治な問題に素直に口を出すことができないのは当然の成り行きではないか。大人の責任としてそこに切り込んで、自ら疑問を口に出していきたい。(無記載)

▼ 日本の学生が朝鮮半島を学ぶことにパッシングがある現状を残念に思った。人権や政治について話し合う機会から当事者意識はできていくのだと思う。今日学んだことを家庭や職場で、地域で、声に出していこう。(女性)

▽ 話がわかりやすくてとても刺激になった。植民地支配そのものが不法行為であるという認識に立つことの重要性がよく理解できた。その上で課題になることとして、「植民地支配されたのは朝鮮が遅れていたからであり、支配されたくなければ実力をつけるべきだった」という言説にどう立ち向かうかということだと考えた。また、「日本が支配しなければロシアに支配され、もっとひどいことをされたはずだ。日本の支配によって進歩したこともある」という言説

にどう思うかを対置して行くかを考える必要があるとも思った。民族自決権を奪ったこと自体が不法だったということを、どうやってそのような言説を受け入れる人に浸透させるのが、実はけっこう難しい気がして、さらに考えていく必要があると思った。

植民地支配等の日本の加害の事実だけを授業しても生徒は受け入れない云々の発言があった。それは一概には言えないというのが実感だ。どのような学習内容であれ、それを生徒がどう受けとめるかは、内容に左右されるのではなく授業方法やその教員と生徒の日常の人間関係や職場の同僚との共同性など、基本的には教育活動の土台によるところが大きいのではないかと思う。加藤さんの指摘を受けとめて、事実を教材として提示することをためらってはならないと思う。(40代男性中教員)

▼ 朝鮮の植民地化、帝国主義政策の知られざる様々な面を知るにつけ、安易な和解からどんどん遠ざかっていく感覚が広がった。自分の中で昔は「よい日本人」の例を示して絶望にとらわれないようにという手法も大事なかなと思っていたが、むしろ自分は「バクロ」さえできていないのではないかと思った。(50代女性高教員)

▽ 学生の状況を含めてお話しをお聞きし、自分が関わる学生のこともふりかえって、植民地や戦争の認識を深めるために加害の事実を知り考えることは不可欠だとあらためて思った。加害の事実をどうとりあげるか、実践的な交流が大事ではないか。(60代男性元中高教員)

▼ 徴用工や慰安婦に関しては中学歴史教科書にほぼ記述がない。私自身も学生時代に学んだ記憶がなく、社会科の教員になってから学んだところだ。教員になっていなければ無関心なままに過ごしていただろう。学ぶ機会が無いのはあえて目を向けさせないようにしている政治的意図があるのだろうか。まだまだ私自身勉強不足で、今日のわかりやすい講演を聴いて、きちんと学んでいきたい、生徒たちと考えていきたいと思った。(30代女性中教員)

▽ 2019年度は韓国の修学旅行に行かなければならなかったもので、その事後学習のため『歴史地理教育 2019年3月号』を読んでいたので、加藤講演は期待して聞いた。期待を裏切らない講演でたいへん興味深く聞いた。今後はこれを授業実践にどう生かしていくかが、私たちの課題であるように思った。(40代男性高教員)

(2) 三橋広夫氏の報告に関して

<日本が植民地支配をして、その後、国としてのその解決に今日のような状況を残してきた韓国の教員との交流。教育実践を通してそれを26年間続けてきた重みを感じる報告でした。>

▽ 私も2001年の交流会に参加して目を開かされたので、感慨深く聞いた。(無記載)

▼ ご自身や数多くの人々の実践をふまえて、これまた説得力のある充実した内容だった。特に韓国の教師の方々が、最初の不信感をのりこえて日本の教師との交流の大切さを納得されたというくだりは感動的で、「共同」、「連帯」をキーワード



にこれまでの実践を振りかえられた意味がよくわかった。生徒・子どもがお互いに意見を交流し合って国家の論理を相対化するとの授業のねらいもよくわかったと思う。(60代男高教員)

▽ 26年間の交流では、お互いの事情を知り合い尊重しながら学びあうことができたのだろう。大きなテーマに「国家の論理を相対化する」ことがあった。晋州の会長甲振均さんの2010年

安重根の実践をあらためてみると、…韓国側の先生たちも同じように、国家の論理を相対化できるような授業を、交流の中でめざしてこられたんだなと感じた。日本の社会、マスコミの状況は厳しいが、がんばっていかないといけない。(60代女元 中教員)

- ▼ 子どもたちが、家庭・社会・マスコミ・SNS 等によって植え付けられた「国家の論理」あるいはネトウヨの論理をどのように崩し、まず子どもたちの先入観を白紙にし、アジア各国との友好関係をどうしたら築けるのか、考えさせなければならないなと思った。話し合いの大切さを学ぶことができた。(無記載)
- ▽ 日韓授業実践交流の場がずっと続いていることに敬意を表す。途中でもう出来ないと思うことはなかったのだろうか。自分はこう教えたいのだけど、そう思わない子もいる。それを大事にしたいという三橋さんの視点がいいなと思った。(女性)
- ▼ 子どもの考えをどう深めるか、授業のあり方を試行する上で参考になった。(無記載)

(3) 石出法太氏の報告に関して

<東京都が出している副読本(中学校版)を資料に、その紹介・分析をされました。あらためて政治利用や国家主義に注目が集まりました。>



- ▼ オリパラ教育を知って驚いた。この国家発揚教育を否定する報道・教育を早く広めなければならないと思った。(無記載)
- ▽ オリパラ教育で、NO といえない国民にさせられていることに抵抗するためにどうするか、切実な問題提起に聞こえた。(無記載)
- ▼ 東京の(オリパラ教育の)パンフの内容など全然知らないことがあり、国家意識の発揚にまると利用されていく様子がよくわかった。(60代女元中教員)
- ▽ オリパラ教育にすごく危機感を持った。地域にナショナリズムがおりていて、恐ろしいほど広がっている現実。東京だけの問題ではなく、それぞれの地域で監視と抗議をし、問題点を明らかにしていく運動が求められていると思う。(60代女元中学教員)
- ▼ とかくスポーツの祭典して無条件に受け入れようとする世の動きに、一歩立ち止まって考えるべき視点を豊富な事実の紹介から示されてとても興味が深まった。(60代男高教員)
- ▽ オリパラ教育に関してはまさに巻きこまれており、夏休み中に5名の生徒を引率してボランティア活動に行くことになっている。また全校生徒の引率もあるが、「最寄り駅を使ってはいけない」「バスは使えない」ということで、とても非現実的な条件を示されている。まさに動員だ。確かに一生に一度の機会ではあるけれど、政治的に安易に利用されるのは危険だとあらためて感じた。(30代女性中教員)
- ▼ オリンピックは官制の祭りなので権力者が大いに利用するだろうと思うと、今年は憂鬱な年だ。勝利、金儲け至上主義、それを煽るマスコミが目につかぶ。東京都の年 35 時間オリパラ教育にビックリ。現場の教師の力が問われる。がんばって欲しい。(女性)
- ▽ DVDは参考になった。(無記載)
- ◆DVD◆ 監修 谷口源太郎 協力 大江正章『検証！オリンピックー華やかな舞台の裏で』
アジア太平洋資料センター (PARC) 2014年 25分